九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

評伝 矢田津世子(四)

花田, 俊典
福岡女子大学講師

https://doi.org/10.15017/16279

出版情報：文獻探究. 6, pp.35-46, 1980-06-08. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

評伝　矢田津世子（四）

花田俊典

昭和六年一月頃に名古屋から単身で上京した矢田津世子は、とりあえず小石川水道端に住む旧知の笹村雪子のもとに身を寄せ、やがて市外下落合にあった自白会館という質素な木造二階建のアパートの一室に落ちついた。こうして矢田は女流作家としての道をいよいよ本格的に歩み始めるわけだが、この矢田と似たような気持を抱いて地方から東京に出て来る若い女性たちが当時はことのほか多かった。

高見順『昭和文学盛衰史』のなかには、「『女人芸術』は地方に支部を作ったが、支部のあったそれぞれの都市で、その頃『女人芸術』派の花形だった人に、名古屋の矢田津世子、広島の大田洋子、神戸の高橋鈴子がいる」と書かれている。その神戸の高橋鈴子もまた、『女人芸術』誌上に小説「街の底を踊る人形」（昭3・8）「A Miniature Tragedy の」（昭4・3）「喚くー済南事件異聞ー」（昭4・9）「居留地街の工場から」（昭4・12）、詩「埠頭にて」（昭4・4）、感想「こひびみー愛する人に捧ぐー」（昭5・3、同4）、翻訳「奇妙な商売倶楽部」（G・K・チェスタアトン、昭5・1）を発表したのち、矢田とほぼ時を同じくして上京した。近藤昌裁『花陰の人ー矢田津世子の生涯』によれば、「上京早々の鈴子の千駄ケ谷の下宿に、白と黒の千鳥格子のスーツを着た津世子が訪ねてきて、以後おみそどっくりのように、津世子あるところに必ず鈴子ありというつきあいがはじまった」のだという。

大田洋子が上京したのは、江刺昭子『草饐ー評伝・大田洋子』（澤書房、昭47・7第二刷）によれば、昭和五年五月頃のことで、彼女は以前にも一度大正十二年に菊池寛を頼って上京し、菊池の「女中とも秘書とも記者ともつかない」まま一年余りを過ごして広島に戻った経験がある。彼女はその後広島を出奔し、尾道や大阪あたりで女給やダンサーをやりながら中央の雑誌に投稿を続けており、『女人芸術』誌上に小説「聖母のみる黄昏」（昭4・6）「華やかな危機」（昭4・10）「朱い訪問者」（昭5・2）「検束のある小説」（昭5・3）、随筆「一インチの傷痕」（昭4・9）が掲載されたのち、意を決して二度目の上京をした。

その頃のことを回想して大田洋子は次のように書いている。

> ー落合に住むようになってから、私はさまざまな人を知り、色々なことを言い聞かされた。いろんな人と遊ばなくてはならない。きれいにして新聞社や雑誌社の編集者を訪れなくてはだめである。一緒にお茶をのんだり、仲良くして、名を知られなくてはだめである。きれいな女が早く文壇に出られるものである。ああ、この教訓はなんということであったろうか。ぞっと

するよりほかない。

けれども私は、ジャーナリストというものへ対して、生真面目すぎるほどの尊敬の念を持っていた。ジャーナリストは高い知性を持ち、文化のおごそかな指導者だと信じていた。文学へ対して真剣で、純粋な情愛を持っているものだと信じていた。男らしさ、意大さ、誠実、本当の人間性、そんなものの均衡が立派にとれた人々であろうと思っていたのだった。

それ故、私はAに誘われればAについてBに誘われればBについて、少くとも信頼している人について、ジャーナリストを訪れた。すると、会う人は立派な人も多かったが、ある人々はまことに調子がよく軽快で、親切で、まるで親類の人々のようであった。多くの人が洋菓子と紅茶をご馳走してくれ、帰ってくる円タクのお金を、私の知らぬ間に運転手へ払ってくれた。

これに続けて大田は、「落合時代からその後にかけ、本人の私の腑におちぬ風説」すなわち「雲をつかむような浮名」が耳に伝わってきたとして、「女流作家の心身は人が空想しているよりもはるかに綺麗に保たれている。誰が自分を妻び、傷つけ、犯す結果になることを敢てするものか。誰だって東京へ浮名を流しに来たのではない。浮名に便乗して作品を売らねばならぬほど、私は自分を安く見積ってはこなかった」と憤懣をぶつけている。[1]『朝日新聞』の懸賞小説に一等入選した「桜の国」(「大阪朝日新聞」昭15・3・12～同7・12)を投稿するときかつての艶聞を気にして小倉緑の筆名を使ったほどの彼女のことであるから、やっきになって過去の汚名をそそごうとしている箇所も随所に見え、そのまま信じ難いところもある一文だが、それはさておき、彼女が昔上京して周囲から言い聞かされたというこの「教訓」については、大岡昇平も「京都の頃」(創元社版『坂口安吾選集』7「月報」、のち『昭和文学への証言』文芸春秋、昭44・7)のなかで「当時の女流作家というものは、大家や編輯者に、少なくとも気があるような、ないような妻振りぐらい見せなくては、文壇に出られなかったもの」だと証言しており、高見順もまた、「私たちは男として、男が自分の地位を利用して弱い女を誘惑するとは下劣極まる行為だと憤慨してはいたが、だからといって女の方も許せない気持だった」と『昭和文学盛衰史』に書いている。

この「教訓」の忠実な実践者として矢田が真杉静枝、大田洋子らとともにしばしば挙げられているのは周知のところだが、その真偽のほどはいまは未詳というほかないだろう。ただ、矢田がいわゆる原稿の売り込みに懸命であったこと自体は十二分に想像のつくところで、たとえば昭和六年秋に知りあった軽部清子に宛てた同年十一月四日付の次のような手紙がある。

わがままな娘ですけど、おばちゃんにひっぱって頂くことを心から希ってゐます。おばちゃんさへ御迷惑でなかったら、少女小説(十五枚程)を書いてみたいと存じます。若し御序の時に御紹介頂けたらうれしいと存じます。それから婦人画報ハむづかしいでせうね。一生懸命書いてみたいと思ってゐるのですけど——[2]

矢田の積極的な原稿売り込みの姿勢が、このような手紙の文面からもうかがえる。その態度はしかし自身の文学そのものを、武器としてというより、むしろ生れながらの端麗な容貌や他人に対する甘えにもっぱらよりかかっており、「わがままな娘ですけど、おばちゃんにひっぱって頂くことを心から希ってゐます」といった手紙の調子などは、その端的な一例といってよい。

とまれ、矢田は昭和六年、「動悸」（『文学時代』三月）「冷い舗道」（『新月』五月？）「波紋」（『文学時代』八月）「村の名物」（『女人芸術』八月）「暴風つぱい海」（『読売新聞』八月二十七日）「第五信―B（中村正常との〝艶書往来〟の一）」（『文学時代』九月）「生意気な髭の話」（『サンデー毎日』九月十三日）「綺譚倶楽部物語」（『文学時代』十月）「冬はまづ海から」（『近代生活』十二月）を発表し、『新潮』十一月誌上の座談会「新らしき時代の恋愛・結婚・貞操に就て語る」に出席した。矢田が拠点とした発表誌はいうまでもなく『女人芸術』と『文学時代』で、上京第一年目にしてはいちおうの成果をおさめたというべきだろう。

『新潮』誌上の座談会では結婚について「根本的にいへば、女も男と同じ様な経済的に独立してゐて、そこから出発した一夫一婦の結合です。―勿論それは何等の拘束的なものでなく、制限的なものでなくて。―それに、この場合、第一に考慮に入れなければならないのは、ソリダリテイの問題です」云々と颯爽として意見を述べたてる矢田も、しかし実作となるとそれほど見るべきものはない。まだまだリアリティに欠けた小手さきだけの作風が目立っていて、それはたとえば「村の名物」（『女人芸術』昭6・8）にもうかがえる。

え？私達の村の名物だって？それァ何といっても先づ庄司の旦那だな。いや、庄司の旦那が名物なんぢやない。旦那の左顳顬の上にとび出てゐるでっかい瘤が名物なんだ。此奴は稀にみる瘤界の逸物で、角型に成長したその尖端は遥かに目の上三寸餘の高さに到達してる見事さだ。おまけに此奴の滑っこい皮膚の下を細い血管が網の目に拡がって、全でこの玉が誰れかに盗まれるのを用心して囲ってるやうなんだ。大抵の地主様がそうであるやうに庄司の旦那も亦営養のいい牡牛みたいに立派な体格だ。事実、みんなは彼を「旦那」なんて云へやしない。「庄司の牛」だ。車屋の留爺が次のやうな一大発見をしてからは殊更らに。といふのは……

書きだしの一節だが、いちおう作品を簡単に見ておけば、この「車屋の留爺」がした「一大発見」というのは「庄司の旦那」の右額にもう一本の「里半程に膨れ上った」「角」ができて、「只四ツ足で歩かないだけ」の「全くの『牛』になった」ということであった。この村では毎年七月の五日から三日間、鎮守の社で「虫ご祭」が盛大に行なわれ、最大のよび物は「三四軒が一組になって造る等身大の大もの」の藁人形で互いにその出来栄えを競いあっていた。それが今年は「庄司の旦那が藁人形に等級をつけて、それの一等から三等迄褒美を出す」というのである。「そればかりぢやない。当日は小作人一同に酒と折詰が配られるといふ豪勢振りだ」。

「だがらせえ、俺ば常日頃云ってるしべ。庄司の牛だってすんな悪党ぢやねえ、ってさ。人の上さ立ってる仁だもン、情知らねえって法ねえしてア。」

源ちやとこの納屋では男達が集って祭の出品物に大忙しだ。大方出来上りかけた石童丸に稚児髷と結びつけ乍ら隣りの権大郎爺は至極悟り顔に頷く。

「んだどもえし、俺ば何としても肘におらねえし。あの業突張の牛が俺達さ配り物するって。お前達薄気味わりいど思はねえしか？」

村人は不安な気もしたが、「遂五斗一反歩の三斗七升を五斗五升に値上げした庄司だ。まさか今更小作人達の御機嫌とりをやるのでもあるまい」と、まあ「くれるものア貰っておく分にはさしさわりもあるまい、と思ひ始めた」ところへ、「車屋の爺」が祭の前夜に酒に酔って「家の旦那さんも抜目ねえがらな。……今度だば七斗三升にするどオ。だからせえ……」と地主の魂胆を暴露した。村人の怒りは爆発した。その翌日、すなわち祭の当日——

杜では旦那が羽織袴で賞品を前に控えてゐる。

が、これは一体どうした事だ！　腫れぼったい冬瓜色の顔した小作人達に担ぎ上げられてくるのはどれもこれも黄造りの「牛」ばかりだ。見物人は最初笑った。だが、行列の尾つまるやうな緊張に押されて一人く小首を傾け始めた。行列が杜に到着した。すると、今迄死んだやうに黙りこくってゐた小作人達が一斉に叫び出した。

「庄司の牛をやっちまへ！」

「俺達ば騙されるでねえどオ。」

「牛の角さひっかゝるな。」

「七斗三升値上げどこ迄も反対だア。」

「去年みてえに泣寝入りすンな。」

黄の牛はさんざんだ。疎とばされるもの。刺されるもの。むしられてほどけるもの！！

この騒動から慌てゝ逃げ出そうとした旦那が、誰れかの投げた石つころで角と怪我した事は痛快だ。いや、遺憾かもしれない。何故なら、それ以後村の名物は二本とも繃帯の中から出た事がないから……。

かくして作品は閉じられるのだが、例によって左翼小説的な題材をモダンなタッチでまとめあげるという矢田の、というより当時の文壇の風潮に安易に巻き込まれてしまった作家たちに共通した傾向が、ここに顕著にあらわれている。きわめて公式的なお座なりの筋立てに、どこにでもありそうなモダンな、個性の稀薄な文体——それをある意味で仕方がないと言うこともできようが、しかしそれではすまされないのが作家というものの宿命なのではないか。ほかならぬ大谷藤子が、つまり矢田とその文学を終生こよなく愛しにその彼女が、当時の矢田の作品について次のように手きびしく批判しているのも無理からぬところであるといえる。

矢田津世子は、真杉静枝、大田洋子氏などと新進女流作家といわれていたが、三人ともまだこれといって注目されるような

作品がなく、ジャーナリズムから珍しがられているにすぎないような状態だった。矢田津世子の作品に、私は少しも感心しなかった。

「あの人が、こんな作品を書くなんて……」

私は、彫りの深い美しい彼女の顔を眼に浮べて、もどかしく残念に思った。[3]

すなわち、矢田も真杉も大田もまだ当時は、若い美人の閨秀作家であるという点で、そして女性解放の呼び声とモダニズムの喧噪に満ちた社会の風潮のなかで、それに迎合する「ジャーナリズムから珍しがられているにすぎな」かったのである。

昭和七年三月、「新女流作家創作集」と銘うった『新潮』は、その創作欄を次のような六人の新進女流作家の短篇小説で組んだ。

荒磯　宗瑛
着物　岡田禎子
堰　戸川エマ
屋根裏のモナ・リザ　何井道子
白と黒　松田解子
神聖な事業　矢田津世子

これは矢田にとっては大きな意味を持つ企画であったといえよう。『文学時代』が新潮社発行であった関係からか、矢田はさきにふれた『新潮』昭和六年十一月号の座談会にまず登場し、ついで昭和七年二月号に「吉行エイスケ氏へ(一一頁評論)」を書いたのち、いよいよ創作欄に進出したのである。もちろん、「新女流作家集」という当時一般によく見られた特集号の企画が矢田の進出の大きな助力となってのことであった。

宗瑛は明治四十年八月二日の生れで本名は片山総子、母は例の松村みね子(片山広子)、兄は吉村鉄太郎(片山達吉)である。堀辰雄らと親交があって「聖家族」(「改造」昭5・11)などのモデルと目されている、「蝋のような肌をした、端麗な顔立の、一種不思議な美貌の持主であった」(田村泰次郎)[4]という。兄達吉とともにはやく文学的出発を遂げ、『山繭』『文学』などに拠って作品を続々と発表し、新興芸術派倶楽部の結成(昭5・4)にも参加している。「胡生の出発」(『山繭』昭和3・4)「座の下に遊ぶ獣の子たち」(『創作月刊』昭3・9、のち『詩と詩論』別冊号刊『小説』昭7・1に再録)「プロテウスの倒影」(『文学』昭4・11)「天の人形」(同、昭5・3)「穴の中の眼」(『文芸春秋』昭5・12)「猟」(『文学時代』昭6・3)「幻影」(『セルパン』昭6・9、のち『小説』昭7・5に再録)など数多くの作品がすでにあり、『文芸春秋』昭和七年三月号には「苦寒行」をも発表して意気軒昂な活躍ぶりを示している。堀辰雄のことばを借りるなら、宗瑛の書くものはいずれも「ラフォンテエヌ風な、気軽な気むづかしさ、機嫌のいい不機嫌に充ちた、すこぶるユニイクな作品であり」、さらにそこから「脱皮」して「われわれ人間の意識下への凝視」に支えられた「乾いた(それは俗衆によって傷つけられない彼の心臓の硬度を示す)、そして奔放と云っていい位の、強い詩」がうかがえるという(「宗瑛の作品について」、『文学』昭5・1)。いかに

も堀辰雄ごのみのハイカラな、しかも高踏的な作風だったわけである。

岡田禎子は明治三十五年三月六日に生れ、郷里の県立松山高女から東京女子大に入学、まもなく岡本綺堂に師事して戯曲を書きはじめた。『改造』昭和四年一月号に発表した「夢魔」を処女作として、綺堂主宰の『舞台』や『女人芸術』などに一幕ものの戯曲を数多く発表し、昭和五年六月には戯曲集『正子とその職業』を改造社から上梓して新進劇作家としての文壇的地位を得た。「片隅の会話」（「婦人公論」昭5・7）「生計の道」（『改造』昭5・11）「村の平和」（『文芸春秋』昭6・7）「海辺にて」（『雄弁』昭6・8）「その大節季」（『舞台』昭6・12）などがすでにあり、この『新潮』昭和七年三月号に「着物」を発表したのちは、同誌上に「田植」（昭7・8）「通り魔」（昭8・2）「珍客」（昭9・12）「留守居」（昭11・3）などの戯曲を寄せている。

戸川エマは戸川秋骨の長女で明治四十四年十二月十日の生れ、「恵悧姫」（『今日の文学』昭6・6）「絵窓」（『新科学的文芸』昭6・11）のほか、『新潮』昭和六年十月号の「新人短篇六人集」の一人として「蜘蛛、蜥蜴、月光――一日の断片」を発表している。ちなみに、あとの五人は上林暁（「アルキビアデスの犬」）那須辰造（「自動車の中」）奥村五十嵐（「捨てられた父」）丸岡明（「旧市街」）福田清人（「海岸線カルカチア」）であった。

松田解子は明治三十八年七月十八日秋田県の生れで、大正十五年の春に上京して労働運動家の大沼渡と結婚、やがて『戦旗』や『女人芸術』を舞台に詩や小説を数多く発表するようになった。「A鉱山の娘」（『戦旗』昭4・1）「飢餓途上」（『女人芸術』昭4・3）「何を以って報るか」（同、昭5・3）「風呂場事件」（『戦旗』昭5・4）「手」（『女人芸術』昭6・1）「地主と失業者」（同、昭6・7）「青空」（『火の鳥』昭6・7）「ネクタイ」（同、昭6・8）のほか、『女人芸術』が募集した「全女性進出行進曲」の歌詞に二等当選（ただし一等は該当作なし）したのも彼女であった。

向井道子については皆目わからない。何か御存知の方があれば教えていただきたい。

したがって向井道子をいちおう別にして、残る五人の女流作家のうち、宗瑛と岡田禎子は新進気鋭の女流として将来を嘱望されており、知名度からいっても戸川エマ、松田解子、そして矢田が彼女らに続いていたと見てよいだろう。

もっとも、その知名度に差があるとはいうものの、それはわずかのものでしかなかった。たとえば中条百合子、あるいは「新鋭文学叢書」として刊行した『放浪記』（改造社、昭5・7）『続放浪記』（同、昭5・11）で一躍有名になった林芙美子などに較べると、一見多彩な活躍を示す宗瑛や『正子とその職業』なる著書を持つ岡田禎子といえども、そこにはかなり大きな文壇的待遇の違いが厳然としてあったのである。

ちなみに、『文学時代』昭和六年三月号は「女流新作家短篇集」と銘うって松田解子（「教師エイ子達」）宗瑛（「猟」）矢田津世

子(「動悸」)の三人の短篇小説を並べているし、同誌昭和七年四月号は「春の哀歌」の総題のもとに城夏子(「猫と風琴と」)戸川エマ(「撃たれたちどり」)天田津世子(「白い舗道」)大谷藤子(「過ぎて行く」)松田解子(「社会の乳房」)の随筆を並べている。『近代生活』昭和七年五月号の「私達の文学的立場」欄には松田解子(「文学上の私の立場について」)大田洋子(「文学的白痴」)壺瑛(「旗について」)岡田禎子(「良き狂言作者に」)戸川エマ(「文壇を覗いて」)が書いており、彼女らにほぼ同等の文壇的な地位が与えられていることが知れるのである。

つまり、矢田と壺瑛らとの差はその程度のものにすぎなかったわけだが、矢田にとって『新潮』は文字どおり初めての檜舞台であったし、新進の女流作家の一人として壺瑛ら先輩には違いない作家たちとともに腕を競うことにそれなりの闘志を抱いたものと思われる。

「神聖な事業」は、じっさいなかなかの力作であるといってよく、かつて東京の「東洋中学会」に勤めていたが失業して国元へ帰ってきた「田所氏」夫婦が金もうけのために始めた「第一婦人聯盟」に近藤とき江という若い女性が参加し、そのプチブル性に幻滅を感じて脱会してゆくという筋立ての小説であった。

いますこし詳しく作品を見ておけば、まず「田所氏」夫婦のもとにいる日安井という「田所氏」の妻民子の「従姉の配偶(つれあい)」がやってきて、次のような話を聞かせる。

「それもさうですがね。いやア、今時の娘ア全く手に負へませんねえ。やれ活動だ、やれデパアトだ。同盟だってね……」

「何です？　同盟て？」

客の菓子を摘みかけて、田所氏は手をひっこめた。

「いいお加減なものらしいですよ。娘達を集めて、見学だの、座談会だの、文芸講演会だの、ってね。知りませんか？　元S新聞にゐた逆水げん子って人がやってますがね。」

安井は、民子へ話しかけた。

「人数なんかも、よっぽど集めてるンでせうなア？」

細君に代って、田所氏が質問した。彼の小さい窪み眼が、眼鏡の奥で更まった。

安井の話を聞いて生活に困っていた「田所氏」は「何となくそわそわした表情で、それから猶も、同盟の規則や内情に就いて、しつっこく」尋ねるのであった。

一方、「市からかなり離れた小出村の三等郵便局の窓口」には近藤とき江という「書留、小包受付係」の女性が働いていた。彼女は郵便物のなかから「街の新聞」を取りだし、「まず三面を開いて、おでこを突き出した」。

「何か変ったことある？」

「ううん。」

首を振って、とき江は、元通り折り目の合ふやうに新聞を畳みかけたが、ひよいと、もいちど、開き返して、「なンだろ？……第一婦人聯盟創立宣言……時代は今や一大危機に遭遇してゐる。この秋に当って本聯盟は、と……世界観絶対主義のもとに……女性の個性人格を尊重し、新時代に相応しき理想と、創造

及び改造の生活を営まんとするものである。故に……心ある女性は来れ！……第一婦人聯盟？」

とき江はこの記事を見て何か思うところがあるらしく「手近にあった書留控へ帳の端つこへ、あの『聯盟』の所在地を、呼吸を縮めながら走り書きした」。

この「第一婦人聯盟」とは「田所氏」夫婦が新たに創設したもので、「盟主」は民子が勤め、自宅を事務所に改造してはや活発な活動を続けている。

第一回の文芸講演会で味をしめた第一婦人聯盟では、二回目の、「時局問題批判大演説会」の準備のために、盟主を始め盟員一同は、全く忙殺されてゐた。

「ぢや、長瀬さん、あなた、これから直ぐ行つてね。社へはもう電話かけてあるし、只、記者に会つて、今度の会を支持してくれるやうに頼めアいいのよ。」

民子は、算盤をはぢく手を一寸休めて、興奮で汗ばんだ顔を側の婦人へ振り向けた。

「でも、先生、あたくしで出来ますかしら？」

オレンジ色の口紅（ルウジュ）で唇の形を直してゐた婦人は、甘えかゝるやうな眼をコムパクトの上から覗かせた。

「あなたのやうな綺麗な女（ひと）でなけアいけないのよ。分つて？」

金歯をみせて、民子は、意味ありげに笑つた。

「アラッ先生、お世辞がお上手ねえ。……ぢやア、これから家へ帰つて着物着換へていつてきますわ。」

「おねがひよ。」

民子は、彼女の背中をポンと叩いた。

「第一婦人聯盟」の実体は、ところがおよそこんなものにすぎず、盟員たちはビラ撒きに着ていく流行の服装の相談とか美容整形の話題などにうつつをぬかしてばかりいる。

そこにとき江が入会すべくやってくるのだが、「世界博愛主義！一切の階級意識の抹殺！　法規の根本的改正！　軍備の撤廃！　消費経済の研究！　……」などと書いてある部屋でしばらく待された彼女が盟主の民子から聞かされた話はだいたい次のようなものであった。

「ここンところで、みなさんにせいぜい助けて頂かなけア。何ですよ。うちの聯盟員の方達は、仕合せなことに、みんなお家柄のお嬢さんばかりでね。ホラ、M銀行の頭取の双児さんねえ、あの方達は二人とも盟員ですし、水野代議士の娘さんもね。……ま、うちへ入つてらつしやれば、みなさんとお親しくなれるし、いろいろと、また、ねえ……だけど、骨ですよ。全く、今日なんかだつて、来週の『満洲派遣軍遺族慰問の夕』に出演のメンバアが気になつてね、早々に温泉（あそこ）をひき上げてきたやうな訳ですもの。ほんとにねえ……」

そして、とき江は「第一婦人聯盟」による「近代女性の恋愛結婚観」の座談会の当日、ついに聯盟をやめることを決意して欠席した。座談会の会場では盟員たちが待ちくたびれて雑談に花を咲かせている。

民子は、みんなを見回した。最近加盟した東洋電力の専務令嬢が姿をみせてゐない。

「あの方、この前は早かったのにねえ。どしたのかしら？……近藤さんも、まだらやアないのオ。」

「アア、あのひとなら来なくたって…」

黒い婦人が、苦っぽく、眉を寄せて笑った。

「ほんとねえ。……あんた、あのひとのしめてる帯みた？　人絹なのよ。」

青い令嬢が声を低めて、隣をつついた。

「愕いたア。うちの女中だってメリンスよ。」

「そんなに、貧乏なの？」

「何でも、田舎のお家、お百姓だってことよ。」

「道理で、土臭いともった。やることがね。」

こんな具合にとき江のことも話題になって、着かざった盟員たちはあげくのはてには「村の処女会と間違へにンでせう。」「お前ちがひにわア。ねえ？」などと言いだすしまつである。そこに遅れてやってきた「断髪の令嬢」が出がけにとき江が来て今日かぎり聯盟をやめると言っていたことを皆に報告した。

「やめる？」

一寸白ちゃけて、民子が反問した。

「ええ、さう言伝てくれってね。」

「フン、四五円の盟費も出せない位なら、やめてくれた方が、ねえ。」

不機嫌な表情を、だが、民子は、盟員のゐる手前、やわらかい微笑で包んだ。

「マア、それンぽっちのお金出せないの？」

青い令嬢が、心から「愕いた」といふやうな顔をした。

「何だねえ、まアツ、あんな田舎者は、田圃の中へ帰って、泥と一緒に暮らすのが一番いいだろうさ。」

それまで黙ってた男衆が、欠伸をしいしい投げ出すやうに言ひ切った時、

「アラ、何ンだか、近藤さんも、そ言ってましたわ。自分は間違ってねた。これから、田舎へ帰って、田圃の泥の中に、自分の歩く道を見出すンだってね…」

断髪の令嬢は、自分の記憶力のよさを誇るかのやうに、首を擡げて、みんなを眺め廻した。

いささか長きにわたったが、およそ以上が「神聖な事業」の梗概である。

これが『女人芸術』の内部批判を意図した小説であることは一見して容易に想像のつくところで、近藤富枝氏も「私はこの作品は『女人芸術』に対する津世子の痛烈な批判として人彼女も案外やるのだなゝと思って読んだ」と言い、「『女人芸術』は昭和七年六月号をもって廃刊となるが、津世子は昭和六年、七年には目立つ仕事を誌上では行なっていないことを思うと、私の想像も当っていないことはあるまい」と念を押している（『花陰の人』）。おそらく近藤氏の脳裡には氏自身の伝える次のような長谷川時雨と矢田との関係

も想起されていたものであるだろう。

にだ長谷川時雨は津世子をあまり買っていなかったと、当時の友人にらがいう。なるほど津世子の親友高橋鈴子をはじめとして、松井絢子、上田文子、中本たか子、八木秋子、戸田豊子、辻山春子、大田洋子などが、それぞれ『女人芸術』の誌上で一頁の紹介記事を書かれて、優遇されているのに、津世子はデビューがおそかったせいもあろうが、一頁紹介はなかった。長谷川の江戸っ子的気質と、津世子の雪国的鬱屈とがあわなかったことが原因かもしれない。

いささか興味深い逸話だが、「神聖な事業」の意図は、しかし長谷川時雨を中心とする『女人芸術』グループそのものへの批判というより、その一部の盟員たちへのプチブル性批判の次元にとどまると見なすべきだと思われる。

ところで、松田解子は後年、初めて女人芸術社を訪ねたときの印象を次のように語っている。

いよいよ案内状にあるとおりの牛込区左内町三十一番地女人芸術社（そこは当時、時代小説では代表的な流行作家であった三上於菟吉氏と夫人の長谷川時雨氏の住居である）へ辿りついてみると、掃き清められた玄関には、さすが風情の色合いにも女流たちの好みのにじむフェルト草履や高かかとの女靴が、きちんとこちらを向いてならんでいる。そこでまたわたしは緊張するが、ともあれ持ち前の東北訛りのつよい地声で「ごめんください」と訪うと、そこへ怜悧そのものといった面立ちの、年若い断髪、和装の女性があらわれ、「あら、松田さんね、…どうぞどうぞ、みなさん、もう、いらしていますよ」と、やさしく如才なく招じ入れてくれる。「あら、お子さん、おんぶして、まアまア、…」と、少しくわたしを先に立てるようにして、玄関左手の部屋の障子をあける。…と、そこにはもうたしかに、「みなさん」が、すなわちわたしがあらかじめ想像して来たとおりの十数人の女流たちが、なんとも洗練された発声と言葉でそれまで交していた会話をふと止めて、（中略）「おそうさん、おろすといいわ」「そうそう、…重かったでしょう」誰いうともなくそういってくれる。（中略）そのとき、さっ、さっ、さっと、ほんとうの衣（絹）擦れの音が廊下にして、すぐにも長谷川時雨先生が現われる。それがわたしなどの目からは、あにかも樋口一葉が生き返って料をきわめた和装も艶でに「昭和」の女たちの座へ紛れこんだのだろうかと怪しまれるほども、その面立ちと着こなし、立ち居に、いわゆる「明治の女」のたゆたっている感じの人である。（中略）わたしはまるで、一つの虚構による世界にでも紛れ込んだような心持ちで長谷川先生にみとれ、やがてその青畳も匂いやかな一室に展開されたお茶の席に、泣くこともできない無教養・無知をさらけ出しつつも、ついに最後まで居つづけたのだった。(5)

この松田解子の一文は、当時の『女人芸術』の集まりの雰囲気をよく伝えてくれる。松田に批判の意図はないが、まるで「神聖な事業」で矢田が揶揄をこめて戯画的に描いてみせた「第一婦人聯盟」の

雰囲気を髣髴とさせるかのようで面白い。秋田から東京に出てきて名古屋に移り、さらに再び単身上京した矢田には人並の見栄こそあれ、格式ある家のうしろだてもまた豊富な財力もなかった。矢田には矢田なりのひけめと不満が『女人芸術』のこういった雰囲気にあったであろうことは、想像に難くないところである。

『新潮』という檜舞台が与えられたとき、矢田はすかさずこの点をついてみせたのだが、繰り返せばそこに『女人芸術』そのものに対する批判という、それほど深い意味をもった大胆な意図があったわけではなかったようである。

たとえば中野重治は、『新潮』昭和六年八月号誌上の文芸時評「『女人芸術』の動き等」において、『女人芸術』の急速な左傾化を歓迎しつつ、『女人芸術』のなかから「プチブル性の急速な清算」ということが唱えられていることを紹介したあと、次のような指摘をなしている。

――私は考へたのであるが――どのページからもプチブル性をかぎ出して来ること、そればかり一心にやつてゐることの中には、やはり明らかに一面のプチブル性がある。革命的意見の主張者達の言ふところは、革命的ではあるが実際から若干はなれてゐる。それは革命的ではあるが必ずしもプロレタリア的ではないことを私は考へた。

そして中野は、「広汎な小ブルジヨアジー下層とプロレタリアートから決して切りはなさないこと、反対にますます結びつけて行くこと、彼女らの中にあるプチブル性を拾ひ上げて行くよりもむしろ、そうしたプチブル性を持ちながらも日に日にプロレタリアートに近づいて来る点を取り上げて行くこと」によって、「そのプチブル性は実践的に克服されて行く」のだと述べている。

つまり、『女人芸術』の持つプチブル性なるものは、なにも矢田の指摘をまたずとも当時一般に言われていたことなのであり、『女人芸術』もまた自ら積極的に取り上げていた問題でもあった。したがって、厳しく言うなら、矢田はそういった時流に便乗（とまで言えるかどうかは疑問だが）して「神聖な事業」に取り組んだといってもあながち失当ではないのである。

じっさい、神近市子は「印象に残った女流作家・作品」（『東京朝日新聞』昭7・12・13〜16）において「神聖な事業」を次のように評している。

矢田津世子氏の「神聖な事業」（新潮三月号）は、若い作家にとっては大膽な構図をやゝ破綻なくまとめ得た点で、成功した作品であった。社会機構の暴露的な方面をねらった作品であったが、プロレタリア側の婦人作家がともすると陥る危険□る仰山な身振り手振りがなく、素直に□いて相当の効果を収めてゐた。

すなわち評論家として『女人芸術』の中心的存在であった神近市子にしてから、「神聖な事業」はまっとうな作品として『女人芸術』自身にとっても意義ある好ましい小説と受けとめているのである。一概に長谷川時雨とその『女人芸術』に対する批判を狙った作品とはいいきれないところであろう。

ちなみに、「神聖な事業」に描かれた「第一婦人聯盟」をことさらに『女人芸術』の女人聯盟と結びつけて考える必要はないかもしれない。「文芸講演会」や「時局問題批判大演説会」を主催したり、機関誌『女性の声』を刊行したりする女性団体という意味では『女人芸術』グループを思わせるところだが、「神聖な事業」のなかには「えら新聞にみた逆水げん子」の主催する「同盟」なるものが登場する。詳しいことについては何も明らかにされていない組織だが、あるいはこのあたりに「社会機構の暴露的な方面をねらった作品」（神近市子）における作者のいざというときの逃げの服業がこらされていたとも想像される。

とまれ、昭和六年から翌七年にかけて発表誌が『近代生活』『火の鳥』『若草』『時事新報』『婦人サロン』『サンデー毎日』などと多彩になり、ついには『新潮』にまで進出した矢田のそれなりの自負が、「神聖な事業」を貫いていることは否定できない。急速に左傾化した『女人芸術』とモダニズムの最先端をゆく『文学時代』とのあいだを左顧右眄していた矢田が、「神聖な事業」において、まがりなりにも自分自身の目と生かそうとつとめている。そういった意味あいからすれば、「神聖な事業」のなかに様々な意義を見出すことができるわけで、矢田にしてはなかなかの力作であることに疑いをはさむ余地はないのである。

『新潮』昭和七年三月号の「記者便り」は、創作欄を「新女流作家創作集」としたことを報告し、「何れも、六氏それぞれの面目、風貌を示して遺憾なきものかと思います」と述べている。「神聖な事業」がはたして矢田の「面目、風貌を示して遺憾なき」作品であるかどうか、そう言いきるにはいまひとつためらいが残る。お座なりにすぎないこの「記者便り」のことばを矢田が真実自作の正当な評言となしえるには、いますこし時を待たねばならないもののようである。

（つづく）

注

(1) この大田洋子の一文については、『草饐 ― 評伝・大田洋子』のなかに「洋子が『桜の国』で懸賞小説に当選して、文壇にカムバックしたときの文章」として紹介されているものに拠ったため、昭和十五年に発表されたものであろうということがわかるだけで、題目、初出誌名ともに不明である。時間の都合で調べる余裕がなかったので、いずれ明らかにすることとしてお許し願いたい。

(2) 『花陰の人 ― 矢田津世子の生涯』で近藤富枝氏が紹介しているものに拠った。

(3) 「回想の女友達 矢田津世子」（『婦人公論』昭48・7）

(4) 『わが文壇青春記』（新潮社、昭38・3）

(5) 『回想の森』（新日本出版社、昭54・4）

――福岡女子大学講師――